

第24回国際電波学会 (URSI) 総会
J分科会 (電波天文学) 関連のプログラム

期日 1993年8月25日-9月2日

会場 国立京都国際会館

- 8月25日午前 Digital techniques in radio astronomy
午後 Commission J business session #1
- 8月26日午前 Radio telescope for the 3rd millenium
午後 Imaging with adaptive antennas and spatial signal processing
- 8月27日午前 Global VLBI
Astrometric & geodetic VLBI
午後 Pulsar timing
Commission J business session #2
- 8月30日午前 Solar radio astronomy
午後 Observatory reports
New results
Commission J business session #3
- 8月31日午前 Radar/radio studies in the solar system
午後 Millimeter & submillimeter astronomy: Instrumentation, techniques & observations
- 9月 1日午前 Radio and radar exploration from spacecraft: Highlights of Magellan at Venus (General lecture by G. Pettengill)
午後 Search for extraterrestrial intelligence
Highlights from poster sessions
- 9月 2日午前 Charm of radio astronomy and it's protection (Tutorial by M. Morimoto)
Refractive effects on trans-atmospheric paths
午後 Radio interference to passive systems

問い合わせ先

石黒正人 電波科学研究連絡委員会J分科会委員長
〒384-13 長野県南佐久郡南牧村野辺山 国立天文台・野辺山
TEL (0267) 63-4396 FAX (0267) 98-2884

科学賞候補者の推薦について

下記科学賞推薦の依頼が当学会宛に届いておりますので、自薦・他薦をお願いいたします。

I) 第1回日産科学賞

1. 候補者対象：自然科学分野で、学術文化の向上発展に大きな貢献をした満50歳未満（平成6年3月末時点）の公的研究期間に所属する研究者で、学術研究上重要な貢献、または新しい研究分野を開拓した者。
2. 推薦依頼件数：各学協会共1件
3. 賞の内容：正賞…賞状、メダル 副賞…研究奨励金500万円
4. 申し込み：平成5年8月20日までに天文学会宛申し込むこと。
5. 褒賞人員：原則として2名
6. その他
 - ・賞の贈呈は平成6年3月の予定。
 - ・同一研究の受賞に複数の研究者の推薦を必要とする場合でも、扱いは1件とする。

II) 第7回日本IBM科学賞

1. 資格：国内の大学或は公的研究機関に所属している物理、化学、コンピューターサイエンス、エレクトロニクスの分野の基礎研究者で、8月15日現在で満45歳以上であること。（国籍は問わない）
2. 申し込み：8月5日までに天文学会へ申し込むこと。
3. 受賞人数：賞金は1件300万円ですが6名（6件）に贈る。
4. 発表：10月上旬に推薦者を通じて通知する。

上記両科学賞の申請用紙は天文学会に届いております。候補者多数の場合は天文学会学術賞選考委員会（委員長：理事長）で決定致します。

日本証券奨学財団 平成4年度研究調査助成募集

標記助成金の募集要項が、学会宛に届いております。対象者は、大学に於て学術文化の研究調査に従事している個人又はグループで、研究者は55歳以下ですが、グループ代表者は55歳以下とは限りません。

理学・工学については、新素材及び環境改善に関する萌芽的研究を重視するとのことです。

◎助成金総額：6,000万円

1件につき100万円程度で、多額の経費を必要とする特別研究調査は、300万円以内。

◎申請期間：平成5年6月1日～8月20日

◎申込締切：天文学会での受付は8月10日までとします。

日本天文学会早川幸男基金募集要項

日本天文学会 早川幸男基金（若手海外学術研究援助基金）内規に基づき*、海外学術研究に対する援助者の募集（1993年度2期分）を以下の要領で行います。

1. 援助金総額 年間約100万円
2. 援助件数 年間数件程度
3. 募集対象期間 1993年10月1日～12月31日の間に日本を出発するもの。
4. 応募必要書類（A4紙に統一すること）
 - (1)応募用カバーシート（本誌の応募用紙をA4に拡大コピーして使用する）
 - (2)海外渡航の主旨説明
 - (3)関連研究論文の写（一編）
 - (4)観測については、観測割当通知および観測提案の写しかそれに準ずるもの
 - (5)国際共同研究については、渡航先の招聘状および研究計画の概要
 - (6)研究集会参加については、当該研究会開催の主旨を説明する資料、プログラム、および応募者の寄与（口頭発表等）を説明するもの
 - (7)大学院生の場合、研究指導者の意見書
 - (8)渡航運賃の見積書
5. 募集締切 1993年8月31日
6. 決定時期 1993年9月中旬
7. 応募書類送付先

〒181 東京都三鷹市大沢2-21-2
国立天文台内

日本天文学会 早川基金募集係

*早川基金内規（天文月報第85巻第12号参照）による援助対象資格は「日本天文学会員で、原則として35歳以下の天文学研究者であって、この基金以外の海外渡航費（滞在費を除く）の援助を受けない者。」です。

1992年度は、会津晃、杵鞭充千男、佐藤明達、高柳和夫、故中野三郎の各氏（五十音順）から合計170万円の御寄付を頂き、清水敏文、原弘久、和田桂一の3氏に援助を行いました。また1993年度1期は、熊谷紫麻見、田代信の両氏に援助を決定しました。援助者には帰国後報告書の提出をお願いします。4倍程度の多数の希望者がいます。引き続き寄付をお願いします。

寄付振込先：住友信託銀行

社団法人日本天文学会
普通口座 5206016

井上 允（会計理事）

早川基金応募カバーシート

(本頁を A4 に拡大コピー・記入して、応募用紙の最初に添付して下さい)

氏名		生年月日	年 月 日
所属		身 分	大学院 (修士・博士) 課程 年生 研 究 生
援助希望 の 内 容	(観測・国際共同研究・国際研究集会) その他 []		(常勤・非常勤) 職員 [職名:] その他 []
渡航期日	年 月 日～ 年 月 日		
渡航期間:	渡航場所:	渡航見積金額: 円	
研究略歴:			
渡航の主旨:			
国際研究会についての寄与: 1. 口頭発表 (Review, Comment), 2. ポスター, 3. その他 []			

人事公募

標準様式：なるべく、以下の項目にしたがってご投稿下さい。結果は必ずお知らせ下さい。

1. 募集人員（ポスト・人数など）、2. (1)所属部門・所属講座、(2)勤務地、3. 専門分野、4. 職務内容・担当科目、5. (1)着任時期、(2)任期、6. 応募資格、7. 提出書類、8. 応募締切・受付期間、9. (1)提出先、(2)問い合わせ先、10. 応募上の注意、11. その他（待遇など）。

上智大学理工学部物理学科教員

1. 助教授（または講師）2名
2. (1)新任助教授（または講師）として研究室を主宰していただきます。
3. 4. 実験物理学（ただし、素粒子・原子核実験を除く）。物理学の学部および大学院を担当。
5. (1)1994年4月1日
6. （望ましい経歴として）博士の学位を有する方。40歳未満の方が望ましい。教育・研究を活発に行い、私立大学としての諸業務にも積極的に参加して下さる方を希望します。国籍は問いません。
7. ①履歴書 ②研究・教育活動歴 ③発表論文リスト ④主要論文10編以内の別刷 ⑤2名以上による推薦書または参考意見書（健康に関する所見を含む） ⑥研究・教育意見書
8. 1993年8月25日
9. (1)〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学理工学部物理学科長 伊藤直紀
(2)同上 電話 03 (3238) 3431
10. 「物理学科教員公募書類在中」と朱書き、書留にて送付のこと。
11. 適任者がいない場合は、採用を保留することがあります。

神戸大学理学部地球惑星科学科教員

1. 助教授1名
2. (1)惑星科学大講座、宇宙科学教育研究分野
3. 4. この分野では宇宙、銀河、星、星間ガス、太陽系空間などにおける宇宙気体力学現象を理論および数値実験的に研究している。これに関連した教育・研究に従事する。
5. (1)決定後なるべく早い時期を希望する。
7. ①履歴書、②業績リスト、③これまでの研究経過（2000字以内）および今後の教育・研究計画（2000字以内）、④応募者について意見を伺える方2名の氏名と連

絡先(外国人の研究者の方でも可)、⑤主要論文の別刷りまたはコピー（10編以内）

8. 平成5年9月3日（金）
9. (1)(2)〒657 神戸市灘区六甲台町1-1
神戸大学理学部地球惑星科学科主任 松田卓也
電話 078-881-1212（内線：4421）
ファックス 078-882-1549
10. 書類は「宇宙科学助教授応募書類」と朱書き、簡易書留で郵送して下さるようお願いいたします。

人事公募結果

茨城大学理学部物理学教室宇宙物質学講座

[I] 教授

1. 公募掲載：1992年12月号
2. 氏名：天埜堯義
3. 前所属：カナダ国立研究所
4. 着任時期：1993年7月1日

[II] 助教授

1. 公募掲載：1992年12月号
2. 氏名：坪井昌人
3. 前所属：国立天文台
4. 着任時期：1993年7月1日

横沢正芳（茨城大理）

国立天文台研究員

1. 公募掲載：1992年11月号
2. 結果（括弧内は応募時点での所属）
 - 1) 電波天文学分野（今回の定員：3名）
梅本智文（日本学術振興会特別研究員）
堤 貴弘（米国ニューメキシコ大学大学院物理天文部博士課程）
 - 三好 真（東京大学大学院理学系研究科博士課程）
 - 2) 「その他」の分野（今回の定員：1名）
吉田道利（京都大学大学院理学研究科博士課程）

第2回公開セミナー「天文学の最前線」のお知らせ

8月18日(水)～20(金)の3日間、名大シンポジオンと名古屋市科学館で、講演会ならびに観測実習、研究実習を、行います。

プログラム予定

平成5年8月18日(水)/19日(木)/20日(金)
銀河の姿(若松)、星の世界(藤田)、地球の環境(前沢)、地球の生い立ち(田中剛)、X線衛星あすか(国枝)、すばる望遠鏡(家)、ニュートリノ天文学(鈴木)、天文教育(沢)、研究実習(水野、松原)、観測

実習（科学館）

* 題目は仮のものです

受講は無料です。受講希望者は往復はがきに住所、氏名、年齢、職業または学校名と電話番号、観測実習希望の有無を記入のうえ、7月15日（木）（当日消印有効）までに下記へ申し込んでください。

名古屋市科学館「公開セミナー係」

〒460 名古屋市中区栄2丁目17番1号

電話 (052) 201-4486 担当 服部

野辺山ミリ波干渉計共同利用公募 国立天文台野辺山宇宙電波観測所共同利用

野辺山ミリ波干渉計の共同利用（1993年12月—1994年5月）の観測プログラム募集（締め切り8月18日）を行います。申し込み用紙請求先は、

〒384-13 長野県南佐久郡南牧村
野辺山宇宙電波観測所共同利用係
Tel: 0267-63-4386

第7回天文教育研究会案内

日時：1993年8月1日（日）～4日（水）
会場：福島市土湯温泉「観山荘」0425(95)2026
参加：講演申込（締切7月10日）
問合せ先：福島大学教育学部理科教育教室

中村泰久 Tel 0425(48)5151
FAX 0425(48)3181

宿泊は別途申込が必要です（締切7月10日）

近畿日本ツーリスト福島支店団体係まで

Tel 0425(21)1411 FAX 0425(24)1525

メインテーマ「天文教育に求められるもの

—今まで欠けていたものは何か—

星空市場

“意見”

本誌4月号「星空市場」、加藤公子さんの「処女」という比喻について意見を読みました。自分が男のせい、1月号の「はるかな時空をかける処女たち——その彗星のささやきを聞け——」を読んでも、加藤さんのおっしゃるような「ひっかかり」は何も感じませんでした。むしろ、この解説記事を書いた著者の表現の巧みに感心したぐらいです。しかし、加藤さんの「意見」は、この種の問題を改めて考えるきっかけを与えてくれました。

差別語と言われているものを含め、人を表現する言葉を用いる場合さまざまな配慮が必要なことは言うまでもないでしょう。しかし、私は放送や出版の分野で行われているような、危ない言葉は何でもいから使うな、と言う言葉の封じ込めには疑問を感じています。

今回の場合、私なりに問題を整理してみると、以下のようになるのではないかと思います。

(1)“EUREKA”向けの記事として解説記事として、「処女彗星」と言う表現を使わなければならない必然性はどの程度あったか。(2)「処女」という言葉を比喩的に用いることに不快感を持つ読者がいるという事実を、著者は認識しておかねばならなかったのか。(3)加藤さんの「ひっかかり」は、どの程度一般性を持つものなのか。

(1)に関して言えば、1月号の当該解説記事は、文章全体が「処女」彗星という言葉が持つイメージを骨格として書かれており、その意味では必然的であり、ほかの言葉で置き換えようとする、文章の発想・構成を最初から変えなければならないと思われまます。著者は

“EUREKA”欄の意義を意識して、こういった表現をしており、その側面だけからいうなら、この解説は成功しているのではないのでしょうか。無味乾燥になりがちなこの種の科学解説としては、珍しく読ませる工夫が見られます。

(2)の点について、処女作、処女峰、処女航海、処女雪など、処女何とかという言い方は一般的です。いわゆる「セクハラ」問題などを特に敏感に意識していない限り、初めてのことに「処女」という言葉を使う形容に抵抗を感じることはないのでしょうか。

使われ方の状況によって違ってくるかと思われますが、女性がおしなべて「処女——」という言葉に「ひっかかり」を感じているなら、「配慮」が必用になるでしょう。結局、その人の持つ世界感(ちょっと大げさですが)によって、言葉の持つポテンシャルは違ってきてしまうのですが、少なくとも1月号の当該解説記事に限った場合、特に「配慮」は必要なかったというのが私の考えです。

しかし、加藤さんの「意見」を読んでしまった私としては、これから先、処女航海などという言葉を使おうとするとかなり意識してしまうことになると思います。

永山幸男（東京都）